



おもてなしマップは、ARを利用したデジタル情報としても公開中です。スマートフォン、タブレットなどで楽しめます。

ARとは

スマートフォンカメラに表示される現実世界に重ねあわせて文字、写真、動画などの情報を映し出す技術のことです。トリエンナーレARとしては「イベント会場」[みなとみらい博物館] [みなとみらい歴史]の3つのチャンネルが用意されています。



AR体験方法

STEP 1

以下のQRコードからjunaioのダウンロードページに飛びアプリをダウンロードします。



iPhone Android

<http://www.junaio.com/download/>

STEP 2

ダウンロード終了後、スマートフォンのブラウザから以下のサイトにアクセスしてください。



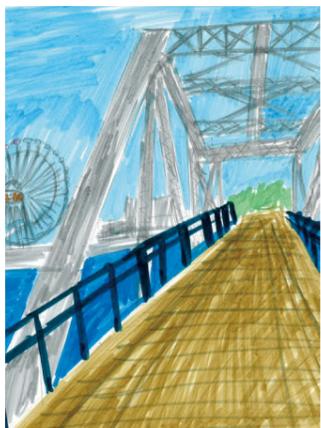
<http://ueno-lab.net/yokotoriAR/>

STEP 3

上記サイトのARチャンネルリストのいずれかをタップすると各ARチャンネルが起動します。

鉄道

新幹線からローカル線まで、日本全国を縦横無尽に走り回る鉄道網。その始まりは、明治5年(1872)新橋～横浜間に開業した路線から延びていったものです。当時の横浜駅は現在のJR桜木町駅、新橋駅は汐留に当たり、片道を53分で結んでいました。徒歩で半日以上、馬車で4時間以上掛かるこの区間をわずか1時間で結んでしまうといふかなりの俊足ぶりですが、きっぷは相当な額であり、今日のように庶民が気軽に乗ることができるものではありませんでした。明治20年(1887)には国府津まで延長され、鉄道は西へ西へと延びていきます。翌々年には神戸までつながり現在の東海道本線が形成されます。当時の横浜駅は行き止まり式で、到着する列車はすべて進行方向を変えなくてはならず、これを解消するため、大正4年(1915)には高島町に横浜駅を移設、従来の横浜駅は桜木町駅となりました。



1 汽車道 JR線・市営地下鉄 桜木町駅から横浜ワールドポーターズ間

廃止となった貨物線跡を利用した遊歩道。現役時代は横浜港と各地を結ぶ貨車が、また昭和55年(1980)の横浜開港120周年にはSL記念列車、平成元年(1989)の横浜博覧会期間中は会場アクセス列車が走ったこともあり。途中のトラス橋は明治時代に作られたもので横浜市認定歴史的建造物に認定されています。

2 原鉄道模型博物館 JR線 横浜駅より徒歩5分 ■みなとみらい線 高島駅より徒歩2分 ■045-640-6699

世界的な鉄道模型製作・収集家の原信太郎氏のコレクションが展示されています。横浜の今昔を再現したジオラマや、日本・ヨーロッパ・アメリカを中心とした世界中の鉄道車両を楽しむことができます。鉄道模型を運転する無料の体験プログラムも!鉄道好きの方はもちろん、親子やカップルも楽しめるスポットです。

3 旧横浜港駅プラットホーム みなとみらい線 馬車道駅または日本大通り駅より徒歩約6分

ポートルインと呼ばれる北米航路に接続する旅客列車が東京駅との間に走っていました。海外への移動手段が海路から空路に変わっていったのに伴い、国際定期航路が撤退し昭和35年(1960)を最後に運転されなくなりましたが、当時のプラットホームが復元されています。

4 野毛山動物園内 横浜市電1518号車 JR線・市営地下鉄 桜木町駅より徒歩約15分

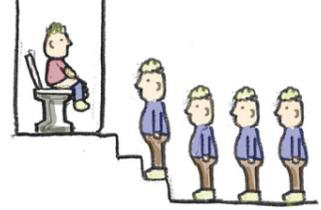
かつては横浜にも路面電車が走っていました。大正4年(1915)に開業し最盛期には20路線を有していましたが、自動車が普及するにつれ交通渋滞の原因にもなり始めたことから、徐々に縮小が進み昭和47年(1972)に全廃されました。1518号車は最後まで活躍した車両のひとつ。

西洋理髪



明治4年(1871)に出された断髪令。これに先立つ明治2年(1869)、山下町に日本で初めての西洋理髪店が開業しました。「ザンギリ頭を叩いてみれば文明開化の音がする」などと歌を詠み、それまで結っていたちよんまげを切るよう促しました。ちよんまげは日本の伝統であり誇り、けれどもちよんまげを切り洋装することで、日本の近代化を欧米に知らしめようと言うのが明治政府の考え方。とはいうものの、断髪を守らなくても罰せられることもなく、かなりルーズな運用だったようです。断髪令に従ってまげを落とした夫を見て「気持ち悪い」と離婚した夫婦がいたり、まげの切り落しに反対して暴動が起きたり、素直に受け入れられるものではなかったようです。しかし明治6年(1873)、明治天皇が自ら断髪を行うと、民衆の断髪も次第に浸透して行ったのだとか。

トイレ



その昔は農作物を育てるための堆肥として、尿は大変な価値がありました。神社や寺院の参道、花見の名所などの観光地に私設の共同便所を設け、在近の農民が回収していたそうです。現在のような衛生観念や羞恥心に基づくものではなく、どうしたら効率的に回収できるかという考えの下に作られたものと言えます。やがて横浜に外国人居留者が増えてくると、今のよう

中世フランスの修道院にて修道士たちが羊の皮で作ったボールを手袋をはめた手で打ち合っていた遊びがテニスの起源と言われ、これをイギリスの軍人ウィングフィールド少佐がルールやラケットなどを規格化し改良したのが、ローンテニス。明治7年



(1874)に誕生し、その2年後には早くも日本にやってきます。横浜に居留する外国人のレクリエーション施設として、本牧山妙香寺の土地に日本で初めての西洋式庭園である山手公園がありましたが、ここでプレーされたのが明治9年(1876)。日本で初めてプレーされたテニスです。当初のプレーヤーは外国人のみでした。

10 テニス発祥記念館 JR線 石川町南口より徒歩約15分 ■045-681-8646

日本で初めてテニスがプレーされた山手公園の中にあります。昔のテニス用具やウェアなど実物が展示されており、その変遷を学ぶことができます。舞臺色のドレスと見まがうようなテニスウェア、100年以上前に作られた竹製のラケット、テニス好きなら一度は見てみたい品々がいっぱい!

テニス

中心

The Map of Center

Yokohama Triennale Supporter "Hama-Treats!"
OMOTENASHI Project

明治3年(1870)、神奈川県庁からガス灯の建設を依頼された高島嘉右衛門が「日本社中」を設立、上海でガス灯建設を行っていたフランス人技師アンリ・プレグランを招いて日本で最初のガス事業が進められました。工場は伊勢山下石炭蔵前(現在の本町小学校)に工場が設けられ、明治5年(1872)9月に完成。そして同月29日には、神奈川県庁付近から馬車道・本町通りまでの間にガス灯十数基が点灯したのです。新暦で10月31日にあたるこの日は、ガスの記念日とされています。当時のガス灯は、ろうそくの1.5倍程度の明るさしかなかったそうで、やがては電灯に取って代わられていきます。その後ガスは工業用生成物や家庭用熱源など新たな用途として活用されていきました。

5 馬車道 みなとみらい線 馬車道駅周辺

日本で最初にガス灯が燈った場所。世界でも珍しいアーチ状のガス灯もあります。ガス灯の形状も良く見ると何種類もあり、イギリスの街中にあるものと同じタイプのものもあります。

6 山下公園前 みなとみらい線 元町中華街駅より徒歩約3分

周辺地域の再整備に伴い昭和60年(1985)に設置され、同年のガスの日から点灯が始まりました。馬車道や本町小学校と同じく1灯のものがほとんどですが、ホテルニューグランド前の交差点には、2灯式のもの2基設置されています。



新聞

江戸時代には日本の新聞とも言えるような「かわら版」がありました。一方、開国後の日本に居留するようになった外国人の間では、外国語で書かれた新聞がすでにいくつ流通していました。日本に住む外国人向けの新聞でしたが、外国語を習得した幕臣や藩士たちにも読まれていたようです。その後日本人向けとして、外国語で書かれた新聞を翻訳した「海外新聞」がジョセフ・彦により発行され、明治3年(1870)には当時神奈川県知事だった井関盛良が横浜の貿易商らに呼びかけ、日本語の日刊新聞「横浜毎日新聞」が刊行されました。これが日本における初めての日本語日刊新聞であり、改題を繰り返しながら昭和16年(1941)まで発行され続けました。

7 日本新聞博物館 みなとみらい線 日本大通り駅3番情文センター口直結 ■045-661-2040

世の中の出来事を伝えてきた日本の新聞が、どのような歩みをたどり、どのように作られて読者の手元に届けられているのかを、貴重な実物資料や映像などで分かりやすく紹介。新聞作りが体験できる「新聞製作工房」などもあります。



行政が管理する公衆トイレが登場します。明治4年(1871)、町会所が費用を負担し、大桶を地面に埋め込み板で囲ったものが街中の83箇所に設けられました。明治12年(1879)、実業家の浅野総一郎は、これに私財を投じ改良したものを63箇所に統廃合し、そこで回収された尿は千葉の農家に売却され、成した財が京浜工業地帯の埋め立て等に使われました。

11 開港広場 みなとみらい線 日本大通り駅より徒歩約6分

浅野総一郎が改良した63箇所のトイレのうちの一つ。同時期に築造されたレンガ造りマンホールと下水管も残っており、開港広場にてガラス越しに見ることができます。

12 コレットマーレ JR線 桜木町駅北改札直結 ■045-222-6500(代)

様々なファッションやグルメ・シネマまで色々楽しめるスポット。どの階も画一的になりがちなトイレですが、こちらの2階(女性専用)・7階は他のフロアと違ったつくりになっていて必見!特に7階のトイレからの眺めは、隠れた絶景。

13 中華街の公衆トイレ「洗手亭」 みなとみらい線 元町・中華街駅より徒歩約10分

中国蘇州の伝統的民家を模した建物になっています。粘土瓦の屋根、陶板の外壁、瑠璃磚の飾り窓が特徴です。中国語でトイレは「洗手间」。洗手間の建物ということで洗手亭なのかも?

14 昭和初期風公衆便所 黄金橋付近・一本橋付近 橋橋付近

関東大震災の復興期に建てられた公衆トイレ。統廃合により数は減ったものの、今でも現役のものがあります。ガラスブロックの壁とコンクリートの躯体でできていることが特徴です。

水道



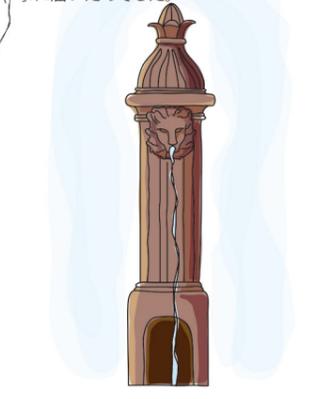
15 近代水道発祥の地の碑 京浜急行線 日ノ出駅より徒歩約15分

遠く津久井からやってきた水は、ここ野毛山にて濾過などの処理をされて各所へと配水されていました。関東大震災で被災したため浄水場としての機能は廃止されましたが、現在でも配水池として活用されています。近代水道の父であるヘンリー・S・パーマーの像も傍で見守っています。

16 インド水塔 みなとみらい線「元町・中華街駅」より徒歩約3分 山下公園内

大正関東大震災で被災したインド人に対する横浜市民の援助に、インド商組合が感謝の意を込めて寄贈したインド式の水飲み場です。現在は水道管が外されており、実際に水を飲むことはできませんが、天井の様子は必見!

開港前の横浜は小さな漁村でした。人口増加によって形成された市街地も、そのほとんどが埋立地。水源として井戸を掘るも塩分を含んでいたりして、良質な水を得ることは難しかったのです。そこで当時の神奈川県は、中国広東や香港で水道建設の実績があったイギリス人技師ヘンリー・S・パーマーを招聘し、横浜上水道建設の任に当たられました。彼が水源として選んだのは、津久井まで三沢村三井を流れる相模川支流の道志川。かつては多摩川から水を引いたものうまいくはなかつた例もあり、40キロ以上も離れた山里から水が届くのか、これをめぐって賭けをした庶民もいたとか。明治20年(1887)9月20日工事の全工程が終わり、10月4日は野毛山の配水池に道志川の水は無事に届いたのでした。



17 獅子頭共用栓とプラフ溝 JR線 石川町駅元町口より徒歩約10分

水道創設当時、市内各所に設けられていた共用栓です。今のように各家庭に蛇口が引かれていることは少なく、このような共用栓です。現在は水道管が外されており、実際に水を飲むことはできませんが、天井の様子は必見!

おもてなしマップ「中心」

横浜港の歴史とともに、国際色豊かな都市として発展し始めた横浜。そんな背景から、さまざまな日本で初めのもの・ことが生まれました。横浜が「中心」となり発信された文化と、スポーツをご紹介します。

「おもてなしプロジェクト」とは 横浜トリエンナーレサポーター「ハマトリートツ」が集めたおすすめ情報をもとに「おもてなしマップ」をつくり、ヨコハマトリエンナーレ2014来場者やみなとみらい21地区に遊びにきた方々に横浜の魅力をお届けするものです。新しいまち、みなとみらい21から歴史ある関内・関外地区まで、ヨコトリサポーターが作ったおもてなしマップを手にまち歩きを楽しもう!



■企画・編集: 横浜トリエンナーレサポーター「ハマトリートツ」
「おもてなしプロジェクトメンバー」
■イラスト: 横浜トリエンナーレサポーター「ハマトリートツ」
「デザインチームメンバー」
クラーク記念国際高等学校 横浜キャンパスの学生の皆様
■紙面デザイン: 山田崇之
■協力: 東京都大学 メディア情報学部 社会メディア学科 上野直樹 研究室
■発行日: 2014年9月15日
■発行所: 横浜トリエンナーレサポーター おもてなしプロジェクト/横浜トリエンナーレサポーター事務局
■助成: 一般社団法人横浜みなとみらい21 平成26年度エリアマネジメント活動助成事業
■お問い合わせ: 横浜トリエンナーレサポーター事務局
【横浜市中央区日ノ出2-158 黄金町エリアマネジメントセンター内】 TEL 045-325-8654

<http://www.yokotorisup.com>

ガス事業

アイスクリーム



18 相生本店
みなとみらい線 馬車道駅5番出口より徒歩約2分 ■045-681-1661
昭和6年(1931)創業の和食と洋食が楽しめる老舗レストラン。当時のレシピを再現して作られたという「横浜馬車道あいす」があります。単品ではもちろん、クリームソーダやあんみつなどにトッピングとして乗せることもできます。

19 YOKOHAMA BASHAMICHI ICE
みなとみらい線 馬車道駅および日本大通り駅より徒歩約6分 ■045-650-8707
明治時代のアイスクリームを現代風にアレンジした「横浜馬車道あいす」を製造・販売するお店。アイスクリームメーカーならではのおいしいメニューが並ぶなかで、イチオシは店頭でしか食べられない「できたて横浜馬車道あいす」!

20 象の鼻カフェ(象の鼻テラス内)
みなとみらい線 日本大通り駅出口より徒歩約3分 ■045-680-5677
象の鼻に来たのならこれを食べなきゃ! ワッフルとチョコチップでできた象さんのソフトクリームがあります。時期によっては違う味も楽しめます。アイス以外にも象にちなんだフードもおすすめです。



明治2年(1869)、馬車道にあった氷水屋にてアイスクリームの製造販売が始まりました。店主はアメリカに渡った経験のある町田房三。「あいすくりん」という名称で、氷と塩を使ったシャーベット風だったそうです。現在、日本国内におけるアイスクリームの売上高は年間4,000億円以上と言われ、1人当たりの消費量はアフリットにもなるのだから。それでも、売り出された当時は今のお金で1杯8000円近くしており、庶民にとっては高嶺の花。珍しそうに見るだけで、実際に買っていくのはアイスクリームが浸透していた外国人だけだったそうです。日本アイスクリーム協会は、5月9日をアイスクリームの日とし、馬車道では毎年「馬車道あいす」が道行く人々に無料配布されています。

奈良時代に最初の肉食禁止令が出されてからの約1200年間、日本では肉食が避けられてきました。労働用の牛馬はいたものの、それを食用とする考えはなかったようです。江戸時代末期の開国によって外国人

居住者が増えてくると、食用としての牛肉と言う考え方もたらされ、文久2年(1862)入舟町にあった「伊勢熊」という居酒屋で牛鍋を供したのが始まりと言われています。肉の臭いを和らげるため、味噌やしょうゆと葱で煮込むのが「牛鍋」、一方の関西では平鍋で肉を焼いてから調味料を加える「すきやき」が生まれ、これが牛鍋と融合し、割り下で煮込む関東式のすきやきが出来上がったという説もあるようです。

26 太田なわのれん
京浜急行線 日ノ出町駅より徒歩約7分 ■045-261-0636
明治元年(1868)創業。店先に縄のれんをかけていたものが、そのまま店名になったとか。お酒好きな初代が朝からほろ酔い気分調理場に立つて肉は全て「ぶつ切り」に。今も変わらず、伝統の味を守り続けています。



牛鍋



サンマーマン

横浜のラーメンと言うと、とんこつ醤油スープのいわゆる「家系ラーメン」を連想される方もいらっしゃると思いますが、こちらはもやしを中心とした野菜炒めのおんかけが乗ったラーメン。神奈川県のご当地グルメです。横浜の中華料理屋で賄い飯として出されていたものだから、物資の少ない時代に考案されたメニューだから、その起源には様々な説があります。サンマーマンを漢字で書くと「生碼麵」だったり「三碼麵」だったり。前者はシャキシャキした新鮮な具が乗った麺、後者はもやし、豚肉、ターサイの三種の具が乗った麺、と言う意味があります。作り方、定義も、お店によってバラバラ。しかし少なくとも「肉ともやしや白菜を使用し、野菜はシャキッと手早く炒め、必ずとろみを付けてコクのある具に仕上げる事」は共通しているようです。

食パン



日本のパンは天文18年(1543)、鉄砲とともにポルトガルから種子島にやってきたと言われています。その後キリスト教の伝播とともにパン食という文化も日本人の間で知られるようになりましたが、依然主食はお米。やがて江戸時代に開国によってたくさんの外国人が居留してくるとパンの需要も増えていったのです。彼らの商館や私邸で働いていた日本人が製パン技術を身につけ、万延元年(1860)内海兵吉が「和風パン屋」として、現在の横浜開港記念館のあたりにお店を開いたのが、日本におけるパン屋の始まりです。

21 横浜アンパンマン子どもミュージアム&モール
みなとみらい線 新高島駅より徒歩約7分 / 市営地下鉄 高島町駅より徒歩約7分 ■045-212-4221
横浜アンパンミュージアムのショッピングモールにあるパン屋さん。テレビでおなじみのキャラクターパンが勢ぞろい!

22 ウチキパン
みなとみらい線 元町・中華街駅5番出口より徒歩約1分 ■045-641-1161
イギリス人のロバート・クラークが営んでいた「ココハバーカリー」、そこで焼かれていたものは「イギリス風焼きパン」、今日の食パンの原型です。その衣鉢を引き継いだ打木彦太郎氏が明治21年(1888)に創業し今に続く老舗「パン屋さん」。一番人気の「イングランド」は創業以来焼かれている伝統の一品。

23 ポンパドウル元町本店
JR線 石川町駅より徒歩約7分 ■045-681-3956
今や日本全国に店舗を構えるポンパドウル。もともとは昭和44年(1969)に元町でオープンしたこの本店から始まりました。仕込みから焼き上げまで、約6時間かけて作るフランスパンが自慢です。

江戸時代には長崎の出島にてオランダ人による自家用ビールの醸造が行われていたようですが、日本で始めて商業としてのビール醸造を行ったのは、横浜に住むアメリカ人ウィリアム・コーブランドが明治2年(1869)に設立した「スプリング・ヴァレール・ブルワリー」です。現在の中区千代崎町周辺で湧いていた良質の硬水を使用したもので、その流れは今日の麒麟麦酒に受け継がれています。工場内には路面電車の引込み線が設けられ、全国でも珍しいビール輸送専用の市電が走っていたこともありました。ビール輸送に用いられた車両は磯子区の市電保存館に、ビール作りに使われた井戸は「ビール井戸」として、北方小学校に今でも残されています。

24 驛(うまや)の食卓
JR線 桜木町駅および関内駅より徒歩約7分
横浜の地ビールを醸造する横浜ビール直営のレストラン。ビールのみならず、地元産の食材を使った料理が楽しめます。1F併設の立ち飲みビアスタンドでは、ガラス越しにビール工場を眺めながら、時には醸造士の作業を見学しながら、キャッシュオンスタイルで気軽に過ごせます。

25 YB Shop 驛カフェ
JR線 桜木町駅および関内駅より徒歩約6分
こちらも横浜ビールの直営店。みなとみらい線 馬車道駅より直結のコンビニと併設したユニークなカフェ。フードメニューも充実しており、ランチを取りながら横浜ビールで一杯なんてことも。コーヒーはいつでもおかわり自由なのが嬉しいところ!

ビール



シーフードドリア ナポリタン プリン・ア・ラ・モード



31 ホテルニューグランド本館1階 コーヒーハウス「ザ・カフェ」
みなとみらい線 元町・中華街駅1番出口より徒歩約1分 / JR線 石川町駅より徒歩約13分 ■045-681-1841
昭和2年(1927)に開業したクラシックホテル。その建物は横浜市歴史的建造物や近代化産業遺産として認定されています。ナポリタン発祥として有名ですが、シーフードドリアやプリンアラモードもこのホテルから生まれたのです。本館1階の「ザ・カフェ」でどれも味わうことができます。

フレンチ・スタイルの料理へのこだわりやGHQ将校の宿舎として活用した歴史から、シェフたちが力を注ぎ、料理を提供していたホテルニューグランド。その中から様々な洋食メニューが生まれました。初代総料理長サリール・ワイル氏が、体調を崩した外国人客のために何か喉の通りの良いものをと考案したドリア。2代目総料理長入江茂忠氏が米兵のゆでたスパゲッティに塩・コショウ・ケチャップをかけて食す様を見て考案したナポリタン。実際は、トマトケチャップは1滴も使われておらず、ナポリの屋台料理に似ていることから、その名を名づけられました。また、アメリカ人将校夫人たちを喜ばせたいと考えて、当時のパティシエが考案したプリン・ア・ラ・モード。今でも広く知られる発祥メニューをはじめ、日本の食文化に多大な影響を与えました。



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を使用した。(承認番号 平26情使_第202-GISMAP33110号)